



第142号

発行所 上高井教育会  
発行人 上高井教育会長 純長雄  
山崎 会報編集委員 須坂新聞社  
編集人 黒岩英  
印刷所 須坂新聞社

# 本年度教育会のまとめ

## 教師としての在り方

教育会副会長 田中 稔

本年度の総会では、鴨武彦先生より「国際政治の構造変化と日本」と題して国際政治についてご講演をいただいた。

東西ドイツの統合とその業績としてこれからの問題、ペレストロイカを推進するゴルバチョフ政権へのアメリカ及びE.C.の協力の意義、そしてこれらが地球規模の中でダイナミックに関係しあって大きなうねりとなって推進されていること等国際政治の動きをつぶさにお話しただいて世界の動きを見ることができた。

この問題については代議員会で討議する一方信濃教育会への討議についても論議を重ねてきたが、日々の実践の中においてどう説明して行くかの問題であるとの立場に立つて本年度の研究委員会の研究授業のなかで一歩一歩前進するように研究を深めてきた。

「理科」豊洲小学校六年「水溶液の性質」  
「生活科」仁礼小学校二年「たなばたさまにおねがいしよう」  
「国語」須坂小学校三年「紙芝居を作ろう」  
「授業者」関谷僚子教諭  
「子供達が自ら気付く、ねばり強く追求する国語学習はどうあったらよいか」  
「理科」高甫小学校三年「私達の体の骨や筋肉のはたらき」

授業者 町田真弓教諭  
「問題解決を重視した理科学習はどのようにしたらよいか」  
委員会とは本年度も国語・社会・算数数学・理科・音楽・図工美術・保健体育・技術家庭・英語・道徳・特別活動・保健・特殊教育・生活科・同和教育・学校図書館・生徒指導の一七委員会が組織され、全会員がそれぞれの委員会に所属し、研究授業を通しての授業研究をもとに昨年度の実績の上に立って進めてきた。

同好会では哲学・文学・美術・音楽・理科・書道・算数・数学・体育・地歴・俳文学・教育心理・カウンセリング・技術家庭・道徳の三四の同好会が組織され延べ二三三名の会員が集い活動してきた。その他信濃教育会の調査研究委員会での活動とその報告会・海外視察の発表会・女教師研究会等計画された諸事業がすべてが推進することが出来た。

湾岸戦争が激しい中にある諸行事が滞る事なく進められたことは我が国が平和であることの故であり改めて平和の尊さを痛感する。会員一同がもう一度この上高井教育会の一員として、自ら活動したことを振り返り教師としての在り方を問いたいものである。来年度の発展を期待したい。

臥竜山一帯のマツは日本マツ百選に選定されている。古来日本各所の絶景はマツの美しさによる所が数々で庭園もマツは中心木、第一ランクである。人の心は曲がってはいないが、マツは曲がってはいないほど、ひねくれているほど好まれる。日本列島は北海道を除き、海岸にクロマツ、内陸にアカマツが分布している。

臥竜山一帯のマツは日本マツ百選に選定されている。古来日本各所の絶景はマツの美しさによる所が数々で庭園もマツは中心木、第一ランクである。人の心は曲がってはいないが、マツは曲がってはいないほど、ひねくれているほど好まれる。日本列島は北海道を除き、海岸にクロマツ、内陸にアカマツが分布している。

### 須高の自然④ 臥竜山根上がりねじれ松 (須坂市指定文化財) 堀米 富平



マツもある。臥竜山は玢岩火成岩(の部分と泥岩(堆積岩)の部分とがあるが、固い泥岩に深く根を下すことができなくて浮き上がったと考えられている。また表層土が長い年月、風雨に洗われて根が掘り出された場面も見られる。

ねじれは北風南風に対し臥竜山稜線が斜めに構えているためと思う。南峰尾根沿いにも見られるが他の部分にはねじれ松は見られない。ねじれは老木になつて現れている。

### =教育会だより=

- 1・11 研究委員会世話係委員長会(2)
- 19 第43回県女教師研究大会  
会場 塩尻市民会館及び総合文化センター  
本会より20名参加
- 2・4 第8回常任委員会
- 7 第9回代議員会
- 22 同校会世話係会長会(2)
- 25 第9回常任委員会
- 16 第10回代議員会・委嘱委員会  
事業報告
- 3・18 上高井教育会誌第47号発刊

# 本年度の教育実践

## ～自己形成していくための指導～

本郡の音楽研究委員会のテーマは「美しい表現をめざして粘り強く学習する子どもに育てるにはどうしたらよいか」である。このテーマを私なりに、東中学校の生徒の実態から生徒の意欲を重視し、

特に一人一人の曲への願いを生かした授業の展開を試みた」と考えた。  
私は、「生徒一人一人がどんな声でもいい、精一杯自分の声を出し合える心の開かれた音楽教室でありたい」と願っている。各自がその曲への

自分の願いを持ち、実現のために努力できる、そんな姿を一番大事にしたいと思う。

今回の授業では、一人の願いをとり上げ、それをクラス全員でかなえるための活動を考えてみた。一人の願いを全員が大事に聞き入れ、全員がその願いの実現のために支え合って歌うことができれば、願いをとり上げた生徒はもちろん、全員がクラスの友だちの願いを

実現できた喜び、満足感を得るであらうし、それは次への意欲につながると思わ

### 心を結んだ一つの歌

伊藤文香

「大きな声で歌いたい」というH生の願いをとり上げた時、ソプラノパートでは大きな歌声の実現に行き詰まっていた。そこで本時では、他パートのうま

くいつている練習方法を聞いた上で、ソプラノパートの充実に力を入れることで、一人一人が自信を持ち、それに合わせて他のパートが協力できる、と考えた。

に歌うことで自信のない生徒も安心して自分の声が出せ、ソプラノの生徒から「他パートと合わせたい」という気持ちが生まれた。そして他のパートも今までと違ってソプラノと合わせようとした。今まで自分に自信がなく、他の生徒に何か言われることを気にして、今一つ積極的になれなかったO生が、大勢の先生方に囲まれながらも堂々と一人で歌う姿や、「歌なんて嫌いだ。」といったもほとんど口を開かないY生が、自分から一

生懸命パート練習に参加する姿が見られた。また、多くの生徒達が「H君の願い通りに歌えて良かった。」今日の歌は最高だった。みんなで一

生懸命歌えるって素晴らしいことじゃないかな。」今まで単なる歌なんて、と思っていたのが、今日ですごく変わった。歌が好きになったようだ。」等の感想を持ってくれたことを大変うれしく思う。

ソプラノパートを中心にパート間の支え合いができたのは、教師のパートリーダーへの信頼と援助があったこと、できるパートは生徒が自分たちで進めるように任せたと、パート間・生徒間がいい意味で自然に競い合う気持ちが生まれてきたことからではないかと思う。

ったと思われる。まだ「美しい表現」までには至らなかったが、一人一人が大きな声で歌い合おうとする中から、より高い表現活動としての合唱をめざす足場ができたと考え

る。また、大きい声だからといってただなるように歌うのではなく、他パートの声を聴きながら、他パートを気づ

けたと思われ。また「美しい表現」までには至らなかったが、一人一人が大きな声で歌い合おうとする中から、より高い表現活動としての合唱をめざす足場ができたと考え

る。また、大きい声だからといってただなるように歌うのではなく、他パートの声を聴きながら、他パートを気づ

### 外国人講師との共同授業

綿内 剛美

近年の英語教育は、受信型から発信型へ、わかれば良い英語から使える英語へと変わった、コミュニケーションの手

段としての英語を目指してきている。従来の文法中心の授業からの脱皮と同時に「生き

た言葉」としての英語の学習が求められている。つまり、言語活動を重視した指導を行うことが重要なのである。

学習指導の場で英語を「生きた言葉」として用いるための最良の方法は、イングリッシュ・ネイティブ・スピーカーが教室に一人であろうと存在することであり、また英語を、そのネイティブ・スピーカーとともに、生きた言葉として用いる活動を多様に行うことである。ここに外国人講師の招致と共同授業の意義があるわけである。

初は何もわからず、外国人講師の自己紹介とそれに対する単発的な数個の質問だけで終ったり、新出単語の発音練習や本文のモデルリーダーイングだけで終わっており、ただ単に

テープレコーダーの役割をしてもらっただけで、授業の中

でどのように活動してもらったのか、外国人講師は何を望んでいるのか、何ができるのかなどということは余り考えなかった。しかし、試行錯誤をして経験を重ねていくうちに、外国人講師には本来の英語の

力、教養に加え、明るさ、生徒の内へ溶けこもうとする意欲、喜怒哀楽の場面に応じたアクション、ジェスチャー等々、生徒を英語の世界に引き込もうと懸命に努力していることがわかってきた。そこで最近では、教科書の題材を使用しながらも、それをコミュニケーション的な場面へと発展させる工夫多量の生きた英語を聞かせ(インプット)、ある程度話させること(アウトプット)を中心にすえ、日常の授業の中で外国人講師をどう生かした教材を作り、共同授業を構築していくかを考え実践している。

今年度、このような考えにたつて二度の研究授業をやらせていただき、多くの先生方や外国人講師の方たちから、多方面におけるご指導、ご示唆をいただき感謝するとともに今後の授業に生かしたいと考えている。(相森中)

# 算数・数学科の研究授業を振り返って

## 前角 増次

校内の算数係であり、重点研究の「算数科」にも属していたので、二年続けて算数・数学科研究委員会に入りました。そして、委員長の高沢先生に頼まれたこともあり、授業を引き受けました。

今年、小中共に図形分野の単元に決めました。その後、小委員会では、授業構想について話し合い、こまの真ん中（円の中心）を見つけていく場面を設定しました。

委員長と副委員長の先生方には、本校まで来ていただいて授業案を検討しました。

また、隣の学級で授業をやっていたり、こまの用紙をたくさん切り抜いていたいたり、本校の先生方にもお世話になりました。

教材研究を重ねる中で、心棒が中心にある物とそうでない物とでは、ダンボール箱の上で回すと、音が異なることにも気づかされました。

よく回るこまとよく回らないこまの対比の場面では、個人かグループごとにこまを渡して、自分で回して比べさせるとよかったです。

こまの中心を見つめる場面では、困っている児童に、今何で困っているのか、どうしたいのかなど机間巡視しながら話し合うとよかったです。児童から、「何か、使っていない。」「先生、紙ない。」と言ってくるのを待っていた時は、なかなか出ないので、こちらから出そうと何度も思っていました。が、出してくれました。本当に良かったとホッとしました。そして、Y児が「できた。」という言葉で結んでくれました。

T児とY児の言い合いの場面では、二人の論点をはっきりさせて、他の児童も関わらせていくとよかったです。

そして、最後に、紙を折って見つけた中心との『ずれ』を確認させるとよかったです。

T児の「少しぐらいの誤差はいいんだ」という考えを変えてあげることができず、彼にとって、正確にやることの大切さを学ぶよい機会だったのに、生かせなくて残念でした。

ひとりひとりの児童が、「生きる」授業をやっているか、私にとって、専門でもなく、不得意な教科である算数・数学科でしたが、じっくり学ぶよい機会になりました。

(仁礼小)

### 平成2年度 上高井教育会研究委員会

## 研究授業実践者

(敬称略)

委員会名	委員長名	第1回研究日 (7月3日)	第2回研究日 (11月29日)
国語	浅岡 修一	笠井 淳 (常盤中)	関谷 僚子 (須坂小)
社会	小林 裕	佐藤 一義 (小布施中)	碓井 明美 (日滝小)
算数数学	西沢 享良	前角 増次 (仁礼小)	北村 雅 (相森中)
理科	石井 光男	野池 正明 (豊洲小)	町田 真弓 (高甫小)
音楽	内川 栄次	小田切千芳 (高山小)	伊藤 文香 (東中)
図工美術	高野 重治	伊藤 礼子 (小布施中)	北沢 晃 (豊洲小)
保健体育	清水 眞	三石 直 (相森中)	青木 貞雄 (旭ヶ丘小)
技術家庭	平林 博	梶大会 (宮川まゆみ)まとめ	藤原 明美 (高山小)
英語	深堀 昭夫	清水 保博 (墨坂中)	綿内 剛美 (相森中)
道徳	牧 康夫	渡辺 佳和 (小布施中)	返町 輝雄 (栗ガ丘小)
特活	神林 信雄	島田 昌英 (相森中)	百瀬 宏明 (栗ガ丘小)
保健	小沢 順子	各校発表	各校発表
特殊教育	丸山 武雄	渡辺 武彦 (高山中)	授業分析
生活科	市川 和恵	阪田 智栄子 (仁礼小)	倉田みゆき (高山小)
同和教育	宮沢 勲	島田 一生 (墨坂中)	千野 俊彦 (小山小)
学校図書	和田 邑吉	前田 博展 (日滝小)	講演 梶内図書館長
生徒指導	早川 毅	講演 中央児童相談所	講演 須坂警察署 竹内初枝

## 校章・校歌めぐり⑫

### 豊洲小学校



現在の校章は昭和三十三年の一般公募の当選作品をもって制定された。創作者は南小河南町の池田実氏(当時四十一歳)である。

図案はまん中に豊洲の「豊」の文字を置き、その外側を須坂市の市章にある「ス」の文字で六角形に囲み、一ばん外側にりんごの葉を五枚配置している。



校歌は、昭和二十六年に豊洲中学校の校歌として、作詞坂本一郎、作曲平井康三郎の両氏によって作られたものであるが、昭和二十八年から豊洲小学校においても校歌として歌われるようになり現在に至っている。

坂本一郎氏(東京学芸大学教授)はその二年間にわたって図書館教育の講師として指導いただいたことがご縁でお願いした。平井康三郎氏については当時すでに有数の作曲家であったが、豊洲中学校長関野良蔵先生のお兄さんで信大で音楽を教えておられた須田隆之助氏のお骨折りで作曲を依頼した。

豊洲の地に根ざしたたくましさ、心の豊かさ、開拓の精神に重きをよせて作られており、一人ひとりが精いっぱい自分の花を咲かせようとする気持ちで歌い継がれている。

(井上光由)

「豊」を「ス」で囲んであるのは、須坂市の中の豊洲小学校という意味であり、りんごの葉はりんご産地として知られる豊洲の地域の特徴を表すとともに「立派なりんごが育っていくときと同様に、子どもたちも幼いころから愛情のこもったこまやかな指導によって、心豊かにたくましく育ってほしい。」という願いがこめられている。

# 火ばら談義



ある土曜日の午後、私のクラス(二年生)のRさんから電話が架かってきました。「もしもし、あのね先生。今日ね、私テレビのニュースに出たんだよ。」「えー、いつ出たの?」あのね、おもちつき大会があって、そこでおもちにあんこをつけているところだよ。先生見てた?」偶然、そのニュースを見ていて、森

## 「もしもし、あのね先生」

小林 みか

上の子も出ていたのは、わかったのですが、肝心のRさんは見た覚えがないのです。「そう、先生ちょうど見ていたんだけど、Rさんのところだけ見てなかったのかな。」電話の向こうで、がっかりしているRさんの顔が浮かんできます。「ふーん。NちゃんやTさんも出たよ。」「すごいね。おもちおいしかったの。」などと、いろいろ話し

ているうちに、テレビに出演したのはRさんの手だけ、おもちをにぎっている、あんこだらけの手だけということがわかりました。確かにそういう場面はありましたが、いくら毎日一緒にいる子どもたちでも、手までは見分けがつきません。電話を切ったから思わず笑ってしまいました。テレビに出た感激をだれかに伝えたくて、私に電話をしてくれたのでしよう。近ごろは時々子どもたちから電話がきます。最初は、何かあったのかと、ドキッとしますが、T君は、「先生、今日下校すぎまで、そり遊びをしていてごめんなさい。H君もやっていたんだけど。」友だちの事も、しっかりとつけ加えるところが、なんとT君らしくてふきだしそのうになりました。Eさんは「先生、算数の宿題のプリントを学校へ置いてきちゃった。」ここで終わらず、「代わりに一から九の段までノートにやっています。」これではしかりようがりません。どの電話も、その子が自分の事を伝えようと、一生懸命になっている姿が見えてきます。電話が鳴ると「今度は誰からかな。」と、ちょっぴり期待してしまふこのごろです。(森上小)

## 主の足音を聞いて...

返町 輝雄

階段を真紅に染める  
サルビアの子ども撫でて家路に向ふ小布施町では公民館が中心となり、各種団体に呼びかけ、町ぐるみで花いっぱい運動を進めている。  
春にはパンジー・チューリップ、夏はサルビア・マリーゴールドそして秋には菊といった具合に、町内至るところで四季折々の花が咲き乱れている。

栗ガ丘小学校では、北斎館や高井鴻山館への通り道に、

## 私の教育相談

竹内 正

一月二十四日、一年二組の生徒にとって中学校入学後二度目の教育相談が始まった。普段はあまり自分担任と言葉をかわすことのないおとなしいT君は、相談用紙に「勉強の仕方があまりよくわからない」とだけ書いてあった。そんなT君との相談の折りだった。どうもテスト勉強しているうちに飽きて、テレビや漫画を見てしまうことがありま

す。「そうか。T君が今のところ一番気になっていることは、そのことなんだね。困ったなあ。どんな教科かな。」数年前です。「勉強の前に自分な

りの計画を立てているよね。」「一応、やる前に見当は立てているのですが...」この話しをしているうちに、T君は計画段階であせっていたためか、最初から難しい問題に立ちむかい、手におえずやる気をなくしている傾向も

ありそうなのが分かってきた。やる気はあるのだが学習内容の決め出し、順序や軽重、時間配分などを知らなかったT君に、参考までにと一例を紹介してあげると、「そういうやり方なら、なんとなくできるような気がしてきました。」と、笑顔を浮かべ

生が勤労の尊さという立場で次のような話をされた。「畑の南瓜は主の足音を聞いて大きくなる」と。毎日足繁く南瓜畑に通ってこそ、丸々と味のいい南瓜が期待できるのだと思う。この話、土いじりをする者に言い得て妙である。秋には正面玄関の階段に六十近いプランターのサルビアを飾ってみた。子どもたちが花のそばへ寄って、そっと触れている。真紅に染めたサルビアの美しさに心を奪われたのである。どうも花づくりは、子どもの指導と相通じるものがある。花に心を寄せながら、温度

で帰っていった。十分なアトバイスではなかったが、T君なりに満足してくれたようだ。しかし、生徒が帰った後、学習意欲という点から考えると家庭の状況・友人関係を含め他にも様々な要因があると思われた。また、教師の側はどうであろうかと自分に問い、授業を振り返ってみた。教材研究は十分であるか。生徒の心情にあった楽しい内容になっていくか。そう考えるとまだまだ日々の授業内容について工夫を重ねていかなくてはならないことが山積みしていることを反省させられる。これまで小学校を経験してきて、今年度から常盤中学校で国語を担当させていただいている。教育相談をしている

## 編集後記